

大平さんを偲ぶ

中曾根康弘

正直にいつて、私は大平さんとそう親しい間柄ではなかった。役所も大蔵省と内務省であるし、派閥の源流もどちらかといえば、主流派と野党派の垣根があった。佐藤内閣の末期から一緒に仕事をしようになり、外務大臣、通産大臣として日韓大陸棚石油開発協定を協力して仕上げたりしたし、また、第一次石油危機の際には、アラブ寄りを主張する私と米国を大事にする大平さんと対立したこともあった。

しかし今から思うと、田中内閣ができ、外務大臣に就任してから、大平さんは次次第に国を背負う政治家としての雰囲気と王道を歩むステイスマンシップをすっかりそなえてきたように思う。落着き、自信、諦念と闘志と活力と一念が美しく織り成して、その人柄にいぶし銀のような光沢を持ちはじめた。それは、とても私ごとが及ぶことのできなかつた人生の裏表に徹した高次の世界にすわり込んでいたようである。この頃から、求道者としての影がさらに強く射してきた。日中航空協定や財政処理であえて泥をあびることをいとわなかつた。男子の本懐を悟られて、不惜身命の域に達せられたのであろうか。『落日燃ゆ』であつたのであろうか。

私は、総理になつた大平さんと数回二人で静かに話し合つたことがある。その時に私はこう申し上げた。

「およそ一国の宰相になるといふことは、天命が下りたといふことです。その天命が何であるかは、その宰相自身にしかわからないと思う。それが何であれ、あなたが自分の直感でその天命を知り、その天命を果たしようといふときは、無条件であなたを支持し協力したいと思ひます。ただし、筋の通らないことには反対しますよ。」

大平さんはそれを聞いて、はじめは私の発言の真意が解しかねるふうであったが、やがてニッコリ笑って握手された。例の四十日抗争の時には、正直にいつて、私は自ら出したこの言葉に非常に拘束されていた。今から思うと不幸なことであったと思う。

大平さんは「鈍牛」といわれたが、それは側近がつけたPR用のあだ名であった。実際は聖牛であったと思う。良心の放射能をあびて、常に自分を反省し、自分をさいなんできた求道者であったように思う。お互いに政治家であるから、ゴルフでいえばOBラインすれすれのところまで球が行くこともある。その時に良心の痛みを感じて、すぐフェアウェイに球を戻すという性格の人だったと思う。私などは、その点大平さんなどよりルーズな性格だ。大平さんはよく本屋に行つて本を買い、ときどき英語の単語を使い、たまには讚美歌を歌つたというが、私たち同時代人は、よくそのことに感情移入できる。お互いに若干キザだと思われる言動があると思うが、戦前の学生時代に仕込まれた教養主義、理知主義の産物だからしかたがない。しかし、うらやましいことは、大平さんの場合、それがぎらつかず、人間的な皮膜で包まれていたことだった。茫洋とした非都会的な味がぎらつきを消していた。そして常に温和な瀬戸内の微風を漂わせていた。

人間の評価は、棺をおおつて定まるといわれている。その意味で時は人の審判者でもある。その時を自ら設定する人もいる。三島由紀夫氏がそうであったろう。大平さんの場合は、自然に劇的に舞台が整えられていた。大平さんは、神の恩寵を最も受けられた方となった。

大平内閣の新政策策定のために集まった人々は、環太平洋問題や田園都市問題や総合安全保障問題や家庭基盤整備問題などを勉強し、大平精神を体して日本を逞しく前進させていくに違いない。一粒の麦は、永遠の存在となったと思う。